

名取市総合防災訓練において同行避難訓練を実施

～その課題を探る～

中央支部

5月24日、名取市総合防災訓練が尚絅学院大学を会場として開催され、県との合同による林野火災防ぎょ訓練も併せて実施された。訓練には消防、警察、自衛隊、関係機関など約200人が参加し、大規模災害を想定した実践的な訓練が行われた。

中央支部では、名取市と「災害時における愛玩動物の保護に関する協定」を締結しており、例年、同行避難訓練の運営に協力している。

今回、避難所となる体育館玄関前にペット専用スペースとなるテントが設置され、中央支部岩沼班会員が日頃より分散保管している資材を運び入れ、クレート・サークルの組み立てやブルーシートをテント横張りやフロアーマットとして敷設するなど短時間で受け入れ環境を整備した。

訓練には、当該避難所指定地域に居住する住民約20名と犬10頭が参加した。参加者には受付でエントリーシートを記入してもらい、インスタントカメラによる撮影やマイクロチップリーダーによる個体確認を実施した後、クレートトレーニングを体験していただいた。

避難所では、飼い主とペットが同じ空間で過ごせるとは限らず、犬はクレート内で待機することが想定される。そのため今回は、実際の避難環境を意識し、飼い主と離れて一定時間過ごす訓練をおこなった。また、クレートには飼い主およびペット情報を表示し、飼い主には離れた場所で待機していただき、その間、管理方法や展示したペットの防災グッズについての説明を聞いていただいた。

参加した犬の中には、クレートに慣れておらず、収容直後に鳴き続ける個体も見られた。しかし時間の経過とともに落ち着きを取り戻し、訓練終盤に実施されたヘリコプターによる上空での消火活動や救助活動時にも、大きな混乱は見られなかった。短時間ではあったが、クレートを「安心できる場所」と認識する様子もうかがわれ、平時からのクレートトレーニングの重要性を再認識する機会となった。

今回の訓練は、名取市が市内すべての避難所の運営マニュアルの見直し直後に行われたものであり、同行避難における開設手順や受け入れ対応を実践的に確認する機会となった。訓練終了後には、今後の改善に活かすため、参加者へのアンケートも実施された。

近年発生した能登半島地震や大船渡市の山林火災では、ペット同行避難への対応不足から、車中泊や自宅への戻り避難を余儀なくされた事例も報告されている。名取市では市内29か所すべての避難所でのペット受け入れを基本方針としており、今後は設営方法や受付手順などの標準化と水平展開が求められる。

また、大規模災害時には行政職員や支援者の不足も想定されることから、自助・共助を基本とした避難所運営が不可欠となる。円滑な同行避難実現のためには、具体的な運営ルールや実践的マニュアルの整備に加え、平時からの住民啓発や訓練継続が重要である。今後も関係機関と連携しながら、地域防災力の向上のため会として協力に努めていきたい。

(文責：荻原 康則)

